

## 居心地の良さと悪さと ——私の内なる韓国——

木 幡 文 徳

私は、1996年12月、専修大学社会科学研究所（社研）の「アジアにおける平和保障」研究グループの一員として韓国を訪問する機会を得た。この度の訪問は、1993年3月にこれも社研によって企画された韓国訪問について2度目のことである。93年の訪問が主に韓国の主要企業の見学であって、いけば韓国の国力に触れる旅であり、いささか目線の高いものがあったが、今回の訪問は、檀国大学での交流研究会も極めてファミリアな中で行われたのを初めとして、今回の旅の実質的なアレンジメントをしてくれた樋口 淳所員の案内もあって、比較的目線の低い韓国の日常を感じとることのできたものであった（簡単にいえば自分の足で歩いた分が多く、またソウルから慶州までセマウル号で移動しその間に列車の中で人々の様子を観察することができたということに過ぎないのかもしれない）。

ところで、前回の訪問そして今回の訪問でも感じたことなのだが、私は、韓国あるいは韓国の人々に対するとき、うまくは表現できないのだが、それ故言いようのない、居心地の良さと悪さを感じざるのを禁じ得ない。実際、ソウルについてみるとそこには自分と外見上変わらない人々が、自分が生活しているのほとんど変わらぬ生活をしており、立ち居振る舞いにしてもほとんど変わりはなく、即座には外国にきているという感覚はもち得ない。その点では違和感といったものはなく、あたかも自国のある地方にやって来たかの感もあって、旅にでたある種の解放感とないまぜになって心地よさすら感じる。これは旅にでたとき特に欧米諸国で強い緊張感にさらされる私にとっては大きな違いである。一方、人々の間で交わされる会話は、その語尾の強いアクセントは日本のある地方の方言を思わせるものがないではないが、さっぱり理解することはできず、街を見渡せば、漢字、ローマ字による標記はほとんど見られずハンゲルがあふれている。これを見るとやはりここは韓国というまぎれもなく外国なのだと思わざるを得ない。これは私の内面に韓国・韓国の人々に対する「近い感覚」と「遠い感覚」とが同居するやや即物的実例の一つだが、より一般的に韓国に関する問題に接するとき、この近いと感じて居るものが以外に遠い存在であるとの現実を知り、或いは韓国の人々と自分の考え方には大きな開きがあるとの現実に向き合うとき、言いようのない当惑？居心地の悪さを覚えるのである。その一つの理由にはこれまでの私の韓国の人々との交流でやや心残りとなっていることが、影響しているらしい。

私が韓国の人々とかなりの密度で交流を持ったのは、1983年～1985年にかけて専修大学の海外研究員としてアメリカ西海岸のカリフォルニア大学バークレイ校に滞在した時期である。当

時は、ベトナム戦争後の韓国に対するアメリカの移民特例措置もあって、西海岸で活動する韓国の人々の姿がかなり目立つようになってきた時期でもあり、バークレイ校自体にも多くの韓国の学生が見られたし、私の住んで居たインター・ナショナルハウス (I. HOUSE) にも多くの学生が生活していた。そんな中で、私は、1994年の初めから3ヶ月ほど通った大学のエクステンションの英語学校で出会ったR君と特に親しい交流をすることになったのである。さらにはR君を通じて多くの韓国の人々と交流し、韓国の状況を知ることとなったのである。それはR君をとりまく状況あるいは経歴にも含まれて居た。R君は、祖父、父と軍の将軍を務めた家の出身で、カトリック教徒なるがゆえに(中絶を許さない)9人兄弟姉妹を持ち、その内には双子の姉妹もいるということであった。このことからR君が韓国のかかなり上層部の出身であること、自分がそれまで十分意識していなかった韓国におけるカトリックの影響力を知らされたのである。また、父親と母親が子供達に聞かせたくない話をするときには日本語で会話を交わして居ると聞かされたことも忘れられない。R君の父母の受けた教育を想起し、日本との過去の関係に思いを致させたのである。またR君自身、大学を出て、既に兵役を終え、中東へ行って建設事業に従事しアメリカ留学の費用を稼ぎ出したことも聞かされた。このことは、韓国の朝鮮半島における状況、当時の韓国経済を支えるもの、そして韓国の若者のおかれる厳しい状況を私に教えるものであった。ともかくR君そしてその友人達と共によく酒を酌み交わし、大いに語り合ったのである。その際、用いられる言語は勿論英語で、互いにその母国語を解しないが故に一種の「公平さ」すら感じ、私が若干年上であるが故に、彼らが払う礼儀にも心地よさを覚えて居た。R君はその後ルイジアナにある大学に行くためにバークレイを去り、私たちの交流も途絶えてしまった。私の現在の住居の屋根裏部屋のダンボール箱の中には英語学校の名簿があり、それを辿ればあるいはR君の所在を知ることも不可能ではないかも知れないと思いつながら、その努力をしない自分を多少責めるものがこの2度の韓国訪問中も感じられてならないのであった。R君そしてR君を通じての韓国の人々との交流は、その後の私の韓国・韓国の人々との向き合い方に大きな変化と影響を与えたことは私にとって大事な事実である。

同様なことはもうひとつある。当時英語学校に珍しい人物がいたのである。R君によれば、その方は韓国野党(当時)の幹部で韓国国内では一切の政治活動を禁じられ自宅軟禁の状況にあるとのことであり、現在アメリカ各地を視察して歩き、帰国前の数ヶ月をバークレイで過ごし、傍ら英語の勉強をしているとのことであった。R君の紹介でその方を知り、帰国前のパーティにも参加し、日本語で会話を交わしたように記憶して居る。この方からは、2度ほど年賀のご挨拶を戴きながら、ご返事もせず大いなる非礼をしてしまった。誠に持って汗顔の至りである。この方はT氏といい、現在の大統領金泳三氏の側近として知られた方ではないかと新聞・テレビで報道された写真などから推察してはいるが、このような非礼もあって確認してはいない。

こんな風にして私はアメリカ滞在中の韓国の人々との交流を通じて、韓国そして韓国の人々に対してかなり親近感を持つに至ったのである。しかし、一方親近感を持つが故にであろうが、相手の発言・態度に反論するわけではないが、かといって俄には承服し難いといった私流に表現すれば「居心地の悪さ」を覚えたことも少なくない。その幾つかをあげてみよう。

① アメリカ滞在中のことであるが、I. HOUSEにすんでいた若い多分学部所属の韓国からの留学生と会話を交わしていた時のことである。私が「日本文化の多くはお国からの影響を受けていますね」といったことに對し、彼は「そんな昔のことは問題ではない。現在がどうかということこそ問題なんだ。」という答えが返って来たとき。

② やはりアメリカ滞在中のことである。I. HOUSEがクリスマス休暇のためミール・サーヴィスがないのでその時期に開店している数少ないレストランにでかけた時のことである。予て顔見知りのマスターが日本語で親切にメニューについて説明をしてくれたのに対し私はうかつにも「日本語が大変お上手ですね」と言ってしまった。これに答えてマスターが「私たちの時代が時代でしたからね」と静かに返されたとき。

③ 3、4年前の事になろうか。専修大学の現代文化研究会の主催で、李 恢成氏を招いた講演会を開催したおり、出席者の在日韓国人の学生の一人がその発言の枕で「私は前には、日本人なんか皆死んじまえ、と思っていたけど」と言うのを聞いたとき。

④ 今回の檀国大学での研究交流会でのことである。檀国大学の報告者のKang, Tae Hoon先生から、韓国内には「日本は、本当のところは朝鮮半島の統一を望んではない」という有力な見解があると聞かされたとき。

今回の研究交流会で、団長の曾我先生がその報告の柱として述べられたとおり、韓国の人々と我々がいわば民衆レベルで交流を深めて行くことは両国の関係を築き上げる上で極めて重要なことである。ある種の「政治家」が「妄言」を繰り返すことがあればこそ、それに耐えられるだけの、曾我先生いうところのベーシック・コンディションが作られていなければならぬまい。その際、「居心地のよさ」に流される事なく、この「居心地の悪さ」がどこからくるのか忍耐強く探り続けることが、私にとって大切なことなのではないかと考える次第である。

(1997・5・21)